4. 鉄のモニュメント 東京六本木ヒルズ (66 ビル群) 2003.12.5.

66tkyo.htm by M. Nakanishi 200401.8.

昨年 12 月 東京へ行ったついでに 何かと話題の多い六本木ヒルズ 通称六本木六丁目ビル群(66 ビル)を見に行きました。
クリスマスに近い夕方 多くの人でにぎわっていました。
地下鉄の階段にはこの地下でもインターネットがそのまま使えるハートを横にした「インテル」マークが並んでいる。
この界隈 IT ビジネス・情報通信・マスコミ・放送など新しいビジネスの集積地。「東京を変える 日本を変える」といわれている。
昨年完成した東京の高層ビル群と同じく 66 ビルの建設には私の会社の溶接材料も他社の材料と共に使われていまして、その材料展開には苦労しました。
一連のこれら高層ビル群建設に 軽量化が可能な強度の高い新鋼材(高降伏点高靭性鋼)が使われ、特に耐震性に対する配慮から、溶接部にも高いねばさ(靭性)と強度が要求され、新しく開発された高強度高靭性溶接材料が大量に、このビル群建設に使われました。
そんな関係で 汐留・品川・丸の内・大崎のビル群 気になって完成したら見に出かけ そして その一連の高層ビル群の最後が 66 ビル。

どのビルも天を貫く大きさと美しさに見とれ、その華やかさに眼を奪われるのですが、「2003 年問題」として巷でささやかれてきた周りとの調和がいつも帰る時には頭をよぎります。

まあ、そんな意味からすると　この 66 ビルはそんな不安感の頂点のビルか・・・・・・
こんな考え方　時代遅れなのでしょうが・・・・

突如出現した巨大ビル　いったんその中に入るとなんでもできるし、人があふれ　凄い賑わい。
新ビル群が目指しているように　まさに　新しい街が出現した。
ビルの中に　街並とともに人工の自然空間が作られ、熱気にあふれている。

印象としては　これは　パビリオン　ラスベガスの砂漠の町に突如したパビリオン　ビル群ではないか・・・・・・・
一度中に入れば　逆に外へ出さないようにするような内部のわかりにくさ。
迷路ではないが、外へ脱出しようとした時のわかり難さ。むしろ　外へ出にくくしている節も感じる。
　独立・孤立　周辺との調和のない街づくり
ビルの中では　『やさしさも　人間味』を歌うが、外界をシャットアウトした独立・孤立主義　外に出ると冷たい風が吹く・・・・・日本人の一番好きで　それでいて　一番批判している　『村社会』の匂いを感じています。
外をシャットアウトした冷たさ　ある種の関西人が東京に抱くイメージか・・・・・・

スパーマーケット・マクド　銀行　そして　シリコンバレー型 IT ビジネス　など　アメリカ型のビジネスモデルを競い、瞬間・瞬間のスピードで成功を鼓舞していいるあいだに、50 年・100 年のスパンではみんな奈落の底を体現。　新しいビジネスモデルを求めて　もがいている。
成功が大きければ　大きいほど　回りに及ぼした影響は大きい。決して　自分だけでとどまらぬと。
東京にできた新高層ビル群の街になにか　新しいソフトが持ち込まれ、これらの街がセンターとなって　外への広がりのある街づくりの巨星にならないのか・・・・と。
そんなこと考えながら　見上げた東京タワー。
非常にシンプルながら　暖かい　『赤』の照明に感動しました。
まあ　年老いた為に感じるさびしさか・・・とも感じますが、何か違うとビル群を見上げました。
ずっと感じてきた東京新高層ビル群についての期待と後ろめたさそんなことを感じるまま書き連ねました。

2003.1.8.　　東京　六本木ヒルズ　を紹介してくれた友達への返信メールより
Mutsu. Nakanishi

N さんが紹介してくれた 66 ビルの図書館･サロンが自己主張せず、地道にそんな輪につながるといいですね･････

友達が紹介してくれた 66 ビルが始めた新しい息吹
東京にはなかった新しい空間　民間が行政の分野に踏み込む新しいソフト空間　必要かもしれません
新しい社会を築いてゆく原動力かも知れません。　でも　それは『平和と調和』があってこそ････････････････

大学の山仲間　Ｎ氏　のメールより　(抜粋　整理)

友達がくれた 66 ビルの新ビジネスの概要　下記　友達のメールから紹介

新年早々、新しい話題を提供したいと思います。
所は東京都心の六本木に、巨大な森タワーに代表される六本木ヒルズ。凄い人気を博し、大勢の人で満ちあふれています。
しかし、この喧噪とは、まるで別の静寂な世界が、この巨大ビルの中にあります。
最上階に近い４９階にある アカデミーヒルズです。　そこに、新しい考え方で作られた図書館があります。
でも、普通の図書館と全く違うのです。
昨年末、見学の機会を得ましたので、見聞したところを記しましょう。

第一の特長は、会員制です。　二種類ある会員のどちらかに、会費を払ってならないと、この図書館は使えません。
設置・経営体である森ビル(文化事業部が担当)の収益源は、この会費です。
会員には、図書館の全域を使え、中でも、利用時には専用となるオフィスなどを利用できるオフィスメンバーと、そうでない コミュニティメンバーがあります。

前者は、年中どの日でも、２４時間使えます。五人まで受け入れ可能な応接室も使えます。そうしたことを支える設備と体制が　取られているのです。　その分、会費は高く、入会金が三十万円で、月々の会費が六万円必要です。
後者は、利用出来る空間や設備が限定され、時間も朝８時から夜１１時まで限られますが、入会金は一万円で月々の会費は六千円です。
中に、ライブラリーカフェがあります。 また、同じ階にある六本木フォーラムには、大中小の会議室やホールがありますが、図書館(六本木ライブラリー)の会員は自ら主催する会議などに使えます。 料金は必要です。

もっとも、こうした有料図書館というコンセプトは、公立の図書館には受け入れがたいものであるらしく、ごうごうたる非難が寄せられていると伺いました。
曰く、図書館は、公平、無作別、無料公開であるべきだと言うわけです。　一方、見学して、目から鱗が落ちたという、公立の方の感想もあるそうです。

民間企業が、寄付ではなく、自ら設置して有料で運営する図書館というものが、世界で初めて、日本に登場したと言うのは、この国の独創性に新たな光りが差し込んできたような 感じすら受けます。
批判も大切ですが、建設的な思考や取り組みは、それよりまして大事なように思います。

以上 2004.1.8.　Ｎ氏からのメール　抜粋